

No. 92 (2006. 1)  
 国際児童青少年演劇協会  
 日本センター  
 <略称・アシテジ>  
 〒102-0085  
 東京都千代田区六番町13-4  
 浅松ビル2A  
 TEL 03 (5212) 4773  
 FAX 03 (5212) 4772  
 Mail: centre@assitej-japan.jp  
 Web: http://www.assitej-japan.jp/  
 発行者 アシテジ日本センター

ASSITEJ Japan Center



▲「十二月月」(国立中国児童芸術劇院)

開会式と同じ会場にてコロンブスとその息子の話を観劇。舟の甲板を想起させるマストと帆の簡単なセット。役者はよく動く。テキスト中心の見せ方。移民やイヌイト原住民と侵略者を背景とした話だと思えたが、いかんせん全てフランス語でよくわからない。モントリオールはフランス語圏であり、カナダの施策により移民が多く受け入れられており、こういった作品が生まれてくる背景がある。

『キホーテ』というドン・キホーテを題材にした人形劇。役者は男性二人。舞台には黒いテ

年々押し迫った12月18日、22日まで、第5回全国優秀児童演劇展示公演(期間12月16日、25日)の開かれた中国蘇州を訪れ、現在中国で上演されている数多くの作品を見ることのでき、また古くからの知人である中国児童演劇関係者と実りあるお話しができました。日程の違いがありますが、大野幸則をはじめ伊藤巴子、上保節子、管辛忠、砂岡誠、山崎靖明さんが参加しました。全国優秀児童演劇展示公演

は中国全土から子どものための舞台芸術作品が、一堂に会し、優秀作品に賞が与えられるものです。四年に一度、開催地を持ち回りにして実施しているそうです。前々からこのコンクールがあるという話は聞いていたが、05年の11月に具体的な話が伝わってきたので、開催日前でしたが主催者に外国人の参加が可能なかを打診し、快諾をいただいたものです。早速日程をやりくりし、アシテジ会員にも呼びかけ、蘇州へ向かいました。主催は中国文化部芸術局、蘇州市文化局ということ。中国全国から五〇作品を超える応募があり、一次審査を通った二〇余りの作品が蘇州(一部杭州で上演)で一挙に上演され、俳優、評論家、演出家、文化部などからなる審査員によって審査が行われたそうです。

『エル・バンテス』メキシコから来た戦争をテーマに、人間同士の交流を描いた作品。グレイを基調とした舞台にはびび割

作品が多数選ばれていたことです。五〇年の歴史を誇る中国児童芸術劇院の『十二月月』は劇団の総力を挙げた素晴らしい舞台でした。舞台化の視点も多様で、身近なドラッグへの警鐘、妖精の涙をテーマにしたファンタジー、国内戦時代の英雄的な子どもたち、歴史的な冒険物語と言った作品を私たちは見ることができました。後日伺ったところ、優秀演目特別賞に中国児童芸術劇院の『十二月月』(マルシャーク作、日本では「森は生きている」)が選ばれ、優秀演目一等賞に蘇州滑稽劇団、武漢人民芸術劇院、浙江省話劇団、青島話劇院が受賞し、優秀二等賞には北京市児童芸術劇団等七劇団、優秀三等賞には中国福利会児童芸術劇院(上海)等八劇団が選ばれました。

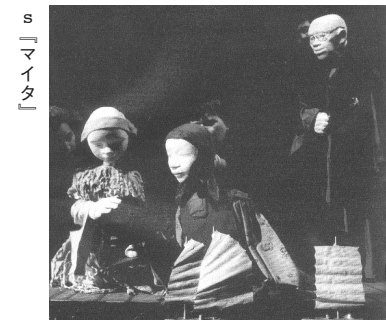
中国児童戯劇研究会(中国アシテジ)会長 李若君(北京市児童芸術劇団名誉団長)、同秘書長 連徳枝(中国児童芸術劇院 国家一级演員)、中国児童芸術劇院院長 周予援、北京市児童芸術劇団団長 洪連成、濟南市児童芸術劇院院長 丁曉秋氏ら、蘇州市は蘇州市文化局長 他の方さん、中国文化部の陳迎憲博士、劇評家の程式如さん等古い友人の皆さんとも数回に渡りお話しする機会を得ました。

現地の人々は喜んでいた。「カーゴ」という人形劇。これは現地ケベックのカンパニーとイギリスとの合作。下手に男性が二人で生演奏を担当。二人の女性は出演者として、くるくると装置を動かしながら、詩的な海辺の少女の話をつづる。照明と装置の関係がとても良い。「マイタ」はアジアの民話を題材にしている。劇場にはいるとかなり作り込んだ舞台が目に入った。すでにライトが美しく、期待が高まる。舞台はアジア。娘を借金のカタにとられた男が娘を取り返しに来る前日の火事で娘は死んでいったという、救いのない話。等身大の人形を持った役者達。時折影絵の挿入されるのが神秘的なイメージを高めている。舞台終盤、かなりのロスコが床下から噴出する。そのあと、舞台全体が動くという大がかりな演出があり、美しくも哀しい話は幕を閉じる。レベルの高い人形劇。

副会長 島田大野  
 理事 静仁 幸則 幸淑 利子 由利 慎二 明子 成子 朋義  
 事務局 鳥田大野 細沼 小林 石坂 藤川 伊藤 香川 上保 菊田

2006 迎春  
 ことしもよろしくおねがいたします  
 国際児童青少年演劇協会  
 (アシテジ) 日本センター  
 会計監査 鈴木 徹 相談役 多田 徹  
 山形 重和 土方 与平

理事 圭 弥久 武 龍 文 陽 一 義 明  
 藤 山 石 木 内 林 じ 永 靖  
 後 藤 下 白 鈴木 内 林 じ 永 靖  
 山崎 町 山



『リトルマツチガール』40分ほどの短さ。主演の女性は58歳。音響を担当するという男性と照明を担当するという男性の三人が、すでに舞台前に入場時から立っていて、笑顔で観客を出迎える。全員がスタッフではなく出演者。リラックスした雰囲気。影絵や映像の視覚的な演出が多い。暗くながちなこのお話を、

『モントリオールで観た作品』  
 『バラエティーに富んで...』  
 『中立公平』(劇団キホ)

『モロリーバイブ』(英題は『リビングメモリー』、『生きてる思い出』) 少女時代の夢やファンタジックな幻想が語られる。一人芝居。だが、テクノロジーで、空想の世界を現実化する。舞台サイドにいるスタッフと映像、音響、照明の素晴らしいチームワークがその世界を支えている。主演の女性、少女の動きが実にチャイミング。

『クラッシュ』はコンテンポラリー系のダンスショー。お笑いの要素を交えながら、ゴレンジャーのような男性三人と女性二人が、時折肉感的要素も交えながらパフォーマンスをする。構成はおおざっぱな印象。でも

『オブジェクト』はパンフレットに載っていたのが面白い写真だっただけに残念な仕上がりが、もう少し、練り上げて欲しかった。

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林 陽一、ふじたあさや

『エル・バンテス』



『エル・バンテス』メキシコから来た戦争をテーマに、人間同士の交流を描いた作品。グレイを基調とした舞台にはびび割

『エル・バンテス』メキシコから来た戦争をテーマに、人間同士の交流を描いた作品。グレイを基調とした舞台にはびび割

# アシテジ・フランクフルト 世界理事会報告

小林 由利子  
(世界理事)

平成17年12月1〜5日まで、ドイツのフランクフルトで世界理事会が開催された。

会長が、是非早急に今後のアシテジの具体的方向性を決めるために年内に世界理事会を開催したいという強い希望を受けての開催であった。フランクフルトはこの時期とても寒いけれども、クリスマス・マーケットがあちこちで店開きして、1年で最も美しい時期でもあった。

主要な議題は、モントリオール世界大会の評価、世界理事会の今後3年間の計画、新しいワーキング・グループ設定と今後の計画、予算状況、会費納入状況、06年度国際児童青少年ワー

ルド・デーの計画、名誉会長賞の再検討、3年間の世界理事会のスケジュールなどであった。

05、08年の事業計画は、(田)事務局の安定した資金、(用)現在の会費システムの見直し、(火)新しい資金源による収益増、(水)フェスティバル・ガイド、(木)アシテジ賞の検討(特に名誉会長賞)、(金)児童青少年演劇の次世代のための活動、(土)アシテジ・センター間のコミュニケーション、(祭)アシテジ・ウェブサイトの充実、(祝)アシテジ・アーカイブの発展、(自)新しいセンターと地域ネットワークの発展、(国)アシテジ・ブックの出版、(代)国際児童青少年演劇ワールド・デー、ア



シテジ・インターナショナル・プロジェクト、アシテジ・インターナショナル・フェスティバル、名誉会長等の検討、(呼)アシテジ・ニュースレターの作成、(休)休暇センター及び門番センターの活性化、(賞)世界理事会の組織化と活動報告、(名)ユネス

## 念願だった アシテジ世界大会への参加

城戸 麻子  
(元青年劇場)

「借金してでも行った方がいいよ。」との言葉になかなか金をはたいて私はモントリオールへ出発した。13ヶ国35劇団の内、10作品を観劇。毎日芝居づけの夢のような一週間だった。どの作品も魅力的だったが、その中で特に心に残る三本を紹介したい。

一つは『キホーテ』(スペイン・人形劇)。真つ暗な舞台上に長机が一つ。両脇のろうそくが静かにともされ芝居が始まる。二人の役者が50程の人形の右手と左手をそれぞれ担当し動かしていく。と、役者の手が人形の手となりそして一人の人間「ドン・キホーテ」に変身する。役者は片方ずつの空いた手で小道具を使い、相手役を演じ、様々なシーンをつくりだしていく。厳密な動きと光と影によって街の喧噪や月明かりまでも想像させる。ドン・キホーテとサンチョ・パンサの破天荒で躍動感に満ちた物語は、私達をぐいぐい引きこみ飽きさせない。遂に二人が最後を迎える時、上演中ずっと燃えていたろうそくは一つ一つ消え命が尽きる様子が舞台を覆っていった。最後の一本が消えていく杯、痛みと切なさで私の胸は一杯になった。見事なラストだった。

もう一つは『チャーリーとバイオレット』(アルゼンチン・クラウン)。うってかわってチャリミングで明るい作品。「OHラプー!」AHハッピー!と叫びたいぐらい愛に溢れていて。50年の結婚記念を迎えた夫



s『キホーテ』



コなどの関係諸機関との連携の可能性、(南)アシテジの広報活動、(学)児童青少年の文化環境に関する調査、という18項目であった。これらの項目をA世界大会、B脚本、C広報、Dネットワーキング、E未来、という5つのワーキング・グループに振り分けた。わたしは、ネットワーキングをブラジル代表とフィンランド代表と担当することになった。特に、会長と事務局長から中国センターについての状況を調べるように要請があった。また、マレーシアとタイが、会費を支払っていないことについての指摘があり、アジアとオセアニア地域代表が協力して状況を把握して、次回までに報告することになった。今後、アジア地域のネットワークについてど

七『チャーリーとバイオレット』



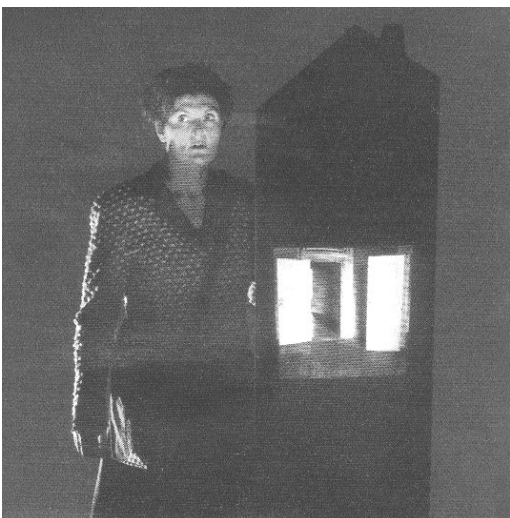
婦の物語。妻が用意した古いアルバム。そこには初めての出会いから今までの大事な思い出がつまっている。かわいらしくカラフルな小道具を使いながらその思い出をテンポよく色鮮やかに蘇らせていく。同時に観客は、二人のこれまでの人生を最も感動的な瞬間に共にプレイバックしていくのである。お互いの愛らしさも変わらないことの素晴らしさと大きな愛に包まれたホンワカと幸せな気持ちになった。老いと若さを首や手の曲げ方一つで切りかえるクラウンの表現もさすがだった。

三本目は『マッチ売りの少女』(デンマーク・人形劇)。人形劇といっても普通イメージする人形が出てくるわけではない。六畳ほどの小さなスペースの真ん中に立つのはマッチ売りの少女の話をしようにとする女の子。両

のようにするか検討する必要があると考える。

今回、特別に名誉会長賞の設立者の一人で寄付をしているナット・イク氏とご子息が世界理事会に参加して、今度のことについて、未来ワーキング・グループ(以下WGと記す)とじっくり話し合った。イク氏は、若い人材の芸術活動をサポートしたいという強い意向があった。アシテジ世界理事会としては、名誉会長賞では、どこの何の賞が明確でないの、何らかの形で「アシテジ」の賞であるということを示す必要があると議論されてきた。このような状況下で長時間にわたる話し合いの結果、名誉会長賞は、「アシテジ・インターナショナル・アーティストティックエクセルレント・名誉会長賞」に名称が変更され、受賞規定が明確化された。ネットワーキングWGは、いくつかの地域に分けて、ネットワークを緻密にしていこうと提案をした。アジア地域に関しては、次回世界大会開催国のオーストラリアと協力して、環太平洋地域英語圏も視野に入れながらネットワークを推進していくことになった。アフリカ地域は、ザンビア代表とルワンダ代表が責任をもって各センターと連絡を取り合うことになった。アルゼンチン代表が、スペイン語圏の

脇には舞台仲間の照明家と音楽家がそれぞれ器材をセッティングしている。いち、にの、さんで三人が現実からお話の世界へ飛び込むと、その小空間は大きなファンタジーへと変化する。照明家がB5版サイズの日めくりの様な白用紙に光をあてる。まるで街のざわめきが聞こえてくるよう、その用紙を一枚ずつ舞台においていくとそれは雪の足あとのように見えてくるのだ。音楽家はかすかな鈴の音から喜びと悲しみを奏で、二人の紡ぎ出す世界と少女の語りが合わさり、観客はいつの間にか物語の中へ誘われていく。まさに芸術的手腕。時々、三人がわざと互いのリズムを狂わせてコミカルな笑いを誘う。そのタイミングも絶妙で心地いい。舞台表現の無限の可能性を感じさせてくれる素晴らしい出来ばえだった。それにしても「どうしてそんな発想ができるの」とため息が出ることしきり。観客に想像を喚起さ



s『マッチ売りの少女』

せることの大きさも問われた気がした。

ところで、言葉のわからない作品を全身で「良かった」と感じた時の感覚は「恋におちる」と似ているかもしれない。本能にビビッとくる感覚。舞台上で繰り上げられる人間の哀しさや愛の豊かさは、それがホンモノであればある程、力強く心に迫ってくる。今回そうした作品にいくつも出会うことができた。とても貴重で幸せな体験だと思う。この思いを日本にもたくさん感じてもらいたい。その為に「今、自分ができることは」と機中で自問自答しながら私はモントリオールを後にした。